

所 属 社会学研究科 福祉社会システム専攻 2年 3570190001  
氏 名 澤田 久美子  
学位の種類 修士(社会福祉学)  
学位論文題名 言語聴覚士の役割：臨床場面での医師と看護師の視点から  
論文審査員 主査 須田 木綿子 教授 副査 小澤 浩明 教授

## 論 文 要 旨

### 1. 研究背景

リハビリテーション専門職である言語聴覚士は、1999年に誕生施行された。そしてその役割は、コミュニケーションや嚥下機能に障害をもつ方々に対し、言語訓練等やそれに必要な検査、助言、指導その他の援助を行うリハビリテーション専門職であると言語聴覚士法(1997年)によって定められている。しかし、言語聴覚士である筆者が実際に業務を遂行していくなかで、「言語聴覚士」としての役割が十分に果たせず、他の専門職と分担可能な役割を担うことも求められ、「何でも屋」になっていると思うことがしばしばある。このことは、臨床場面において、言語聴覚士の役割に対する理解が他の専門職と共通した理解になっていないために生じていると考え、その背景を理解するために以下の検討を行った。

### 2. 研究目的

言語聴覚士の役割を理解するうえで、当事者の自己認識と他の専門職による理解が重要な要素であるといわれている(船津 1997)。しかし、後者についての検討は十分になされていない。そこで本研究では、役割に重要な要素といわれている他者との相互理解に着目し、臨床場面での言語聴覚士の役割を検討する。また、言語聴覚士がその機能を十分に果たしていくための課題について整理することを目的とする。

### 3. 研究方法

臨床場面で医師と看護師の総合的判断が、言語聴覚士にその患者のリハビリテーション(以下、リハビリ)の依頼を出すか否かに集約される。したがって、どのような患者が言語聴覚士に依頼されるのかを把握することで、臨床場面で言語聴覚士が実際に果たしている役割について検討できると考えた。

以下の調査は、東京慈恵会医科大学および東京慈恵会医科大学附属第三病院倫理委員会(倫理委員会受付番号(32-016(10092)))で承認を受けて実施した。

#### 1) カルテ分析

2014年1月から2019年12月までの過去5年間に、筆者が勤務する病院の耳鼻咽喉・頭頸部外科(以下、耳鼻科)を受診した小児(0歳から17歳)患者2,155人のうち、言語聴覚士にリハビリの依頼があったのは32ケースであった。本研究では、これらの特性を、言語聴覚士に依頼がなかったケースと比較した。言語聴覚士に依頼がなかったケースは2,123ケースと膨大であり、医師による治療によって軽快が見込まれるケースも含まれていたため、以下の条件を設定した。①ケースの収集期間は2019年9月から11月までの3ヵ月間とし、②言語聴覚士によるリハビリの対象外と考えられるケースを除いた。そして最終的に得られた78ケースを言語聴覚士に依頼がなかったケースとし、比較の対象とした。

仮説として、医師と看護師には、言語聴覚士の役割について共通した理解が得られていないため、言語聴覚士にリハビリの依頼があった患者と依頼がなかった患者の特性の間に、一定のパターンはみられないと予測した。

#### 2) 医師と看護師への聞き取り調査

調査を実施した耳鼻科の医師7名および外来看護師3名に、カルテ分析の集計結果を示し、これに関

する感想について聞き取りを行った。調査に要した時間は平均 15 分であった。

調査内容を対象者の同意を得てテープに録音した。感想以外に多くの情報が得られたため、すべての情報を使用し逐語記録を作成・整理した。

#### 4. 結果

カルテ分析の結果から、言語聴覚士にリハビリの依頼があった患者の特性は、3 歳から 6 歳を中心とした「発声・発語障害」、「聴覚障害」、「言語・発達障害」をもつ男性・幼児であった。このようなパターンの存在は、仮説とは異なる結果であった。

医師と看護師への聞き取り調査では、上記パターンを示す背景として、診断が可能な年齢と病院の機能分化および診療科の細分化を挙げていた。そして、医師と看護師の言語聴覚士の役割に対する理解は、知る機会がないことを理由に漠然としたものであることがわかった。また、チーム医療の一員として、医師は診断と治療という視点から、看護師は患者の生活という視点からの情報の提供と共有を言語聴覚士に望んでいた。

#### 5. 考察

従来、役割を理解するにあたり重要な要素とされていた自己定義と他の専門職による理解に加え、病院の機能分化と診療科の細分化というコンテキストが、その他の要因として重要であるという新しい論点が得られた。

また、医師や看護師はそれぞれの視点から言語聴覚士に対してチーム医療の一員としてなくてはならない専門職であるという認識をしていた。それゆえ、言語聴覚士の役割を理解するために言語聴覚士からの情報の提供と共有を望んでいた。多職種連携においては、医師、看護師をはじめとする他の専門職との意思疎通が重要であると思われる。そのためには、言語聴覚士からの働きかけが重要であると考えらる。

#### 6. 結論

一つ目に、言語聴覚士の役割は、病院間の機能分化と診療科の細分化によって影響される様子が観察された。言語聴覚士の役割に関する理解は、どの病院のどの診療科に属するののかによって、そこで求められる役割が異なるため、これらを考慮して言語聴覚士の役割について再編する必要がある。

二つ目に、相互理解を促すための働きかけと仕組みづくりが必要である。先行研究では多職種連携の視点から、自身とは異なる職種への理解の重要性が強調されている。しかし、他の専門職と比較し歴史が浅く言語聴覚士の数が少ないことや、個室でのリハビリが中心となっている言語聴覚士にとっては、連携をとるための環境が十分に整っているとは言い難い。そのため、言語聴覚士側から他の職種に向けて自身の役割をアピールする必要がある。

#### 7. 本研究の限界

医療機関で言語聴覚士が最も多く属するのは、リハビリテーション科であるが、本研究は耳鼻咽喉・頭頸部外科での調査に基づいている。また、調査対象も、筆者が所属する病院一件にとどまっている。そのため、本研究結果の一般化には限界があり、異なる機能をもった医療機関や部署に所属する言語聴覚士の役割についてさらに検討を進める必要がある。

また、医師、看護師の視点に加え、他の専門職や患者の視点からの検討を行うことにより、臨床場面で求められている言語聴覚士の役割をより詳細に理解することができると考えられる。